

境内案内 2（細殿、橋殿、神馬舎、渉溪庭、神山）

細殿

細殿は、その正面にある 2 つの大きな砂の円錐で簡単に見分けることができます。立砂と呼ばれるその円錐は、近くにある神山（賀茂別雷命大神が地上に降り立った場所といわれている神聖な山）を表しています。それぞれの円錐の頂上に挿された松葉は、神山の頂上にある常緑の木々を象徴しています。左の円錐には 3 本（奇数）、右の円錐には 2 本（偶数）の松葉があります。これは、上賀茂神社の創設者である賀茂氏によって歴史的に実践されてきた、伝統的で難解な宇宙論である陰陽道で使用されている陰陽の原理を反映しています。

細殿はもともと入母屋屋根を備えた壁の無い建物でしたが、後に木造の外壁が増築されました。この壁は、賀茂祭（葵祭）のために 5 月前半に、重陽神事と烏相撲のために 9 月 9 日に取り去られ、細殿の古来の姿を見ることができます。資料によれば、細殿は鎌倉時代（1185～1333）にはこの場所にあったことが分かっており、現在の平安時代風の御殿は室町時代（1336～1573）の歴史的記録に基づいて 1628 年に建てられました。細殿は国の重要文化財に指定されています。

歴史的に、細殿は、天皇やその他の位の高い参拝者が本殿で祈る前に、彼らを迎えるために使用されていました。現在は、9 月 9 日の烏相撲をはじめとする宗教的な儀式に使用されています。細殿の前で子供たちが相撲の試合に出場するとき、平安時代の精巧な装束を身に着けた斎王代（選ばれた神事に参加する名誉上の巫女）とその付き添いが細殿の中から観戦します。

細殿は一般人が中に入ることができず、外からしか見ることはできません。神前結婚式や音楽の演奏会に使われることもあります。12 月と 1 月には、細殿へと続く階段の両側に、来る年の干支を描いた 2 つの大きな絵馬が展示されます。

橋殿

橋殿は、ならの小川にまたがる壁の無い建物で、さまざまな儀式やお祭り、神聖な舞に利用されています。「橋殿」という名前は「橋」と「礼拝用の建物」を意味する字を組み合わせたもので、もう一つの名前である「舞殿」は「橋」の代わりに「舞」を意味する字に置き換えており、この建物が舞台として使用されることを示しています。記録によれば、鎌倉時代（1185～1333 年）には同じ場所に御殿があったことが示されており、1628 年に入母屋屋根を木の柱で支えた現在の建造物が建てられました。橋殿は重要文化財に指定されています。

橋殿では毎年いくつかの儀式が行われます。5 月 15 日に行われる賀茂祭（葵祭）の期間中に、勅使（天皇の使者）が橋殿で本社の辺りに向かって座り、天皇に代わって賀茂別雷大神への挨拶を読みます。6 月 30 日の夕方、橋殿で夏越大祓と呼ばれるお清めの儀式が行われ、神職がお清めの祈りを唱え、橋殿の端から数千体の小さな紙人形を下の小川に撒きます。

橋殿は一般人が中に入ることができませんが、両側にある橋を渡って、橋殿の建築や周辺の風景を鑑賞することができます。

神馬舎（神聖な馬の小屋）

上賀茂神社の二の鳥居の近く、本社の方へ続く道沿いには、神の馬（神馬）がいる厩舎があります。神馬は神社に奉納されたもので、賀茂別雷大神に神の使いとしてお仕えしています。かつては神社の境内で神馬を飼うのが一般的でしたが、手厚い世話が必要であるため、ほとんどの神社はその慣習を中断しました。

現代では、上賀茂神社の神馬には白馬だけが選ばれています。神馬の「務め」には、神社の参拝者の歓迎や、特定の祭りや儀式への参加などがあります。例えば、1月7日の白馬奏覧（「神聖な馬の視察」）神事では、神馬は儀式用の馬具を装着して境内を歩き、本殿で神様に参拝します。この神事の間に神馬を見ると、その年の不運を追い払えると考えられています。

上賀茂神社の行事の他では、参拝者は、日曜日と祝日の午前 9 時 30 分から午後 3 時まで神馬を見ることができます。この時、神馬へ厩舎で提供されるニンジンの切れ端を与えることができます。

神馬と接するためのルール：

- ・フラッシュ撮影禁止。
- ・お静かにしてください。
- ・馬の頭に触れないでください。
- ・ニンジンを手で直接与えず、お皿であげてください。

渉溪園

上賀茂神社境内の東側にある渉溪園は、平安時代（794～1185 年）の貴族の庭園に着想を得て、曲がりくねった小川を中心に設計されました。そのレイアウトは、宮廷を中心とした芸術と文化の繁栄が特徴の平和な時代だった平安時代（794～1185）に一般的だった庭園の形式に着想を得ています。徳仁天皇の誕生を記念して、1960 年に有名な造園家の中根金作（1917～1995）によって作成されました。渉溪園は、春は鮮やかなアヤメの花、秋は色とりどりのカエデの葉が特徴です。中央にある樹齢 300 年の大きな木は、一つの根から成長した複数の幹で構成されているため、家族に幸福をもたらすと考えられています。

渉溪園のもう一つの特徴は、庭の一角にある不思議な形の大きな石です。この石は「陰陽石（陰と陽の石）」と呼ばれ、まるで石の半分半分が溶け合っ一つになったように見えます。その名前は、日本では歴史的によく占いに使われた、伝統的で難解な宇宙論である陰陽道にちなんでいます。

石の別名は「願い石」です。訪問者は通常、石の両方の部分それぞれに両手を置いて願い事をした後、近くにある賀茂山口神社（またの名を沢田神社）で祈ります。

4 月には渉溪園で「賀茂曲水の宴（曲がりくねった小川の宴）」と呼ばれる、歌を書く行事が行われます。これは、1182 年に、有名な歌人であった当時の上賀茂神社の宮司、賀茂重保が開いた貴族同士の歌の競作を現代的に再現したものです。この行事の際、華やかな平安時代の装束を着た著名な短歌の歌人が曲がりくねった小川の岸に座り、その年の選ばれたテーマに基づいて歌を作ります。歌人らが書いている間に、川に浮かぶ小さな木製の船が、酒の入った器を運んできます。伝統的に、歌人は酒器が到着する前に歌を完成させようとしていました。歌作りが完了すると、歌人たちはそれぞれ、上賀茂神社へ奉納として朗読される詩として 1 つの詩を提出します。

神山

神山は、賀茂別雷大神が地上に降り立ったと言われる場所として、上賀茂神社の歴史にとって欠かせない場所です。神社の伝説によると、賀茂別雷大神は、賀茂氏の身分の高い女性の神聖な息子です。成人祝いの最中に彼が地上を離れて天へ昇った後、母親はもう一度彼に会いたいと願いました。この神様はその後、彼女の夢の中に現れ、彼を歓迎する方法を示しました。示された供物の準備が出来て、儀式が行われた時、賀茂別雷大神は大人の姿で神山に現れました。これが、上賀茂神社の起源であり、この神社の最も重要な祭りである賀茂祭（葵祭としても知られる）の起源であると考えられています。

神山は上賀茂神社の北約 2 kmの所にあり、社務所の近くの小道からはっきりと見えます。神社の主な境内では、細殿の前にある立砂という円錐形の砂は神山を表しています。発掘調査中に神山の周辺で発見された遺物は、縄文時代（紀元前 10,000～300 年）のもので、古代から人々がこの辺りに住んでいたことを示しています。